

環状ブロックの“場”その2・神山型彫器に類する資料について

— 泉北側第3遺跡・復山谷遺跡（6次～8次）補遺 —

山岡 磨由子・青山 幸重

はじめに

前号の研究連絡誌第73号では、石材・母岩の分布状況から泉北側第3遺跡の環状ブロックが地図的機能を有していることについて述べた。この号では器種の分布状況をもとに場の機能について触れ、海沢層産チャートと天城柏峠群産黒曜石から旧石器時代のひとびとの動線を探る。

次に、今年度刊行した復山谷遺跡（6次～8次）の彫器資料について、補足する。

文中の「報告書」は、1では調査報告第650集 印西市泉北側第3遺跡（下層）を、2では同第686集 白井市復山谷遺跡（6次～8次）（下層）を指す。

1. 泉北側第3遺跡環状ブロックの“場”その2

泉北側第3遺跡の環状ブロックは、円環部と北側の集中域とが縦爪のリングのような平面形態となっている。第73号では重複度＝類似度を用いた個々のブロックの親和性を数値化した。ブロックの範囲の広狭、母岩分布状況のパターンを変えていくつかの検証をした結果、同時期に形成された環状のまとまりという認識に至った。

この号では台形様石器、尖頭状石器、加工具類の分布から環状ブロック内の“場”の機能を探ってみたい。

第1図1は環状ブロックで出土した石器の器種別の分布状況である。遺物ドット、引出線には第1・2図2～4で図示した石器をそれぞれ、赤＝台形様石器、緑＝尖頭状石器、青＝磨石・敲石・台石・原石・石斧類に色分けして提示した。引出線に付した数字は調査報告書に記載した挿図番号と一致する。分布図上の石器写真は159は20%、その他は28～29%である。

第1図2は台形様石器の分布を示した。図化したものは調査報告書でa類（横長剥片素材・打瘤付近を平坦剥離）に分類したものであり^{註1)}、最終形態を見越して成形された剥片に簡単な加工が施され、刃部に使用痕を持つ石器はドットのみ留めている。ガラス質

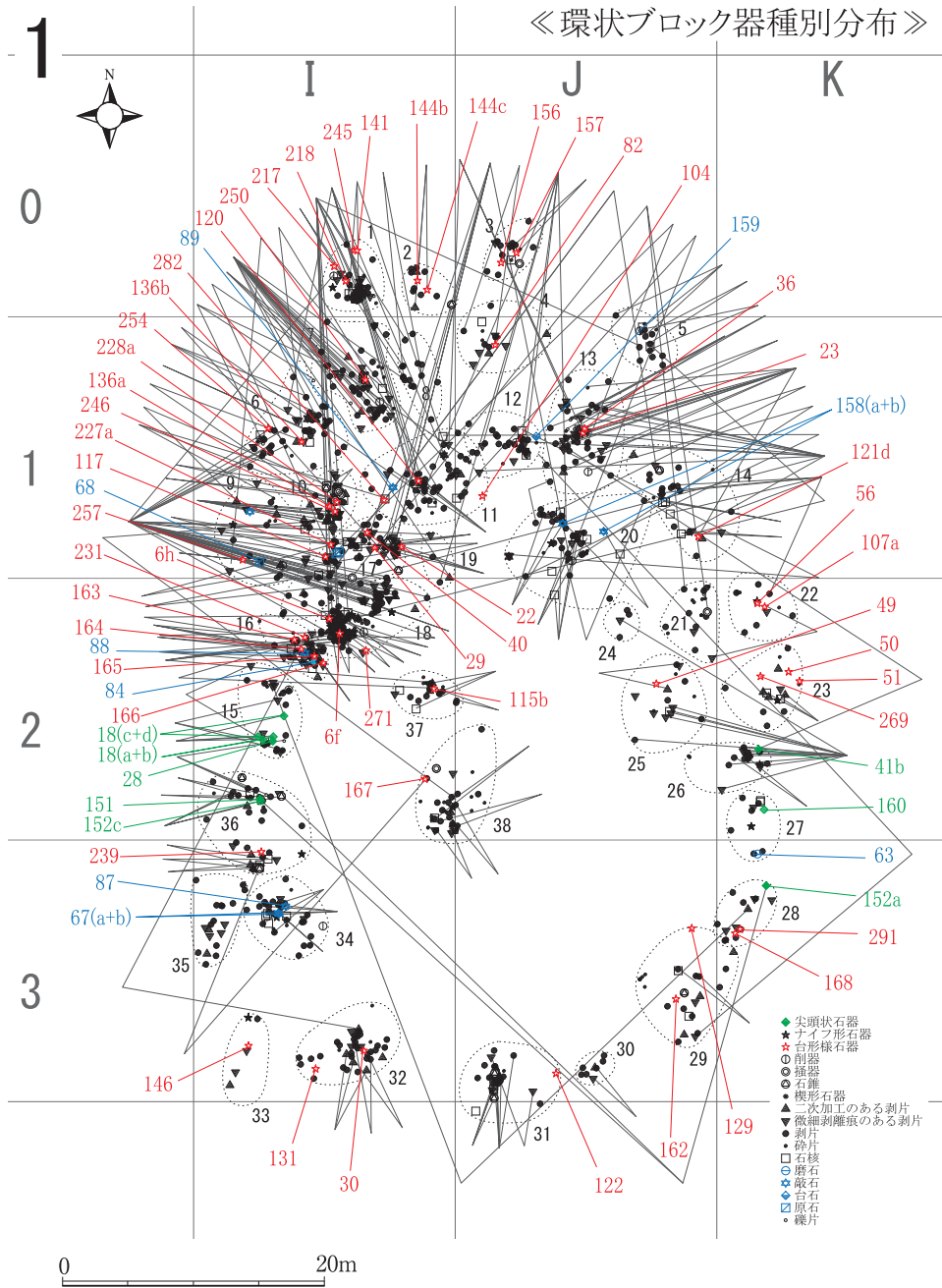
黒色安山岩7点、チャート6点、珪質頁岩3点、嶺岡産珪質頁岩3点、ホルンフェルス、玉髓、碧玉が各1点の全22点である。分布密度は円環部の北西に濃く、敲石、石斧片、原石など、加工具類の分布と一部重なる。

第2図3は尖頭状石器の分布状況である。貝殻状剥片の作出が目的の一つであろうと推測されるため、器種としては石核に分類することも検討したが、この石核自体が刺突目的で使用されたこと、つまり、先端部に“突く・刺す”などしてできた衝撃剥離痕を持ち、出土分布に際だった特徴がみられることから、上林遺跡^{1・2)}に倣い「尖頭状石器」を用いた。環央部のブロックを挟んで東西ほぼ対称に分布する。西側から5点、東側から3点出土しており、粘板岩は約40m距離を隔てて尖頭状石器同士が接合する。台形様石器、加工具の分布とは重ならない。

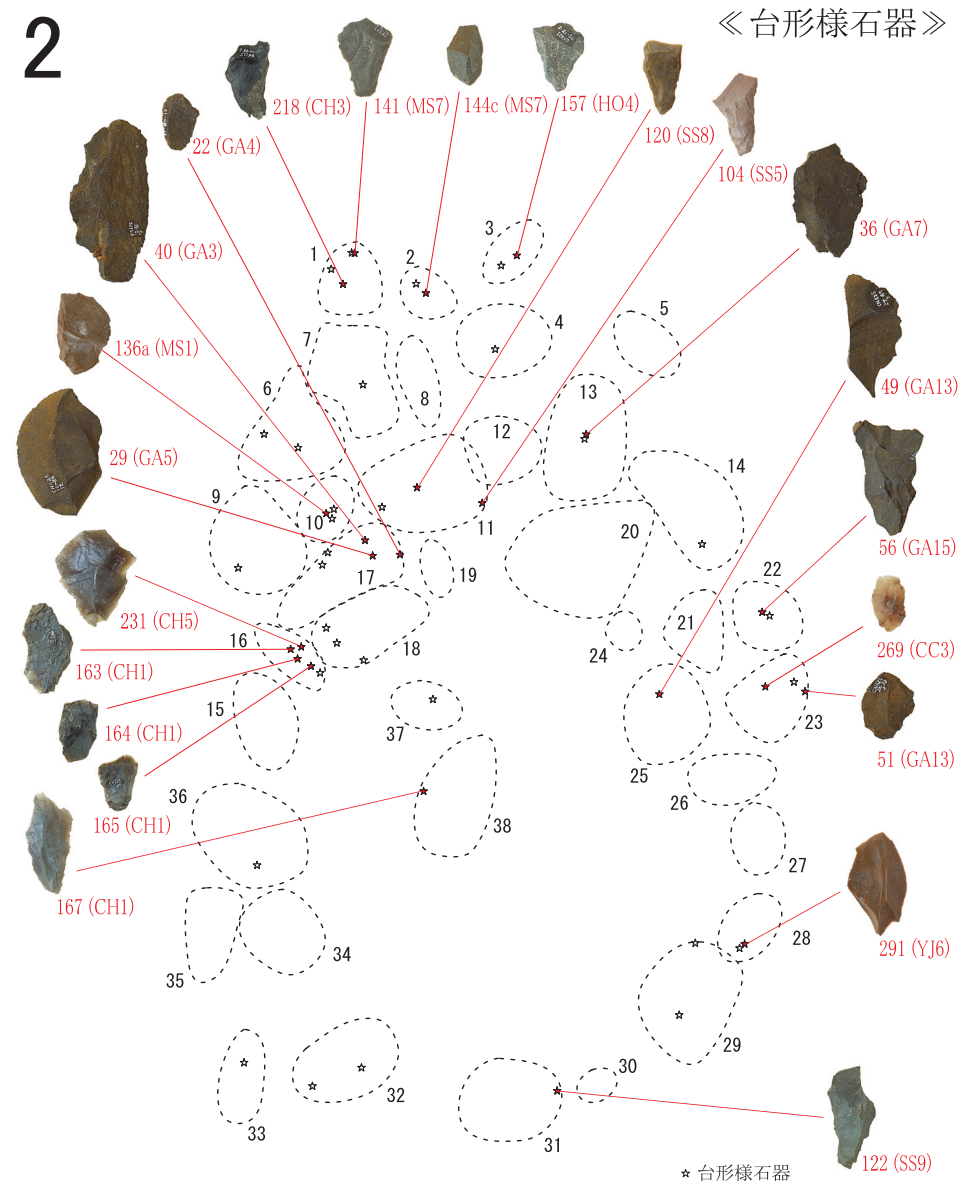
第2図4は加工具の分布であるが、磨石、敲石、台石、原石、石斧類は北側集中域・環状北側に顕著である一方、円環部の中ほどにも敲石と磨石が点在する。器種を分けるにあたっては肉眼と手触りとで使用痕の有無を確認してはいるが、敲打痕や磨り痕の残らない加工具として原石が存在している可能性が否めない。原石は9ブロックと17ブロックから出土しており、石材は斑晶の目立つ流紋岩と粗粒の砂岩である。なお、本報告では剥片（石斧調整剥片）として掲載した84であるが、淡い緑色の凝灰岩で背面に磨り光沢を持っていることから局部磨製石斧の刃部であった可能性が高いため、第2図4でも提示した。84の出土した16ブロックでは海沢層産チャートの剥片・碎片が多く、西関東由来の石斧調整剥片が共伴していることから、このブロックで海沢層産チャートを用いた台形様石器が製作されたものと推測できる。

これらのことから、精美な形状の台形様石器は単独で持ち込まれ、各ブロックに点在するが、多出する海沢層産チャートの一部は加工具によって台形様石器に

第1図 泉北側第3遺跡環状ブロック石器分布1



2

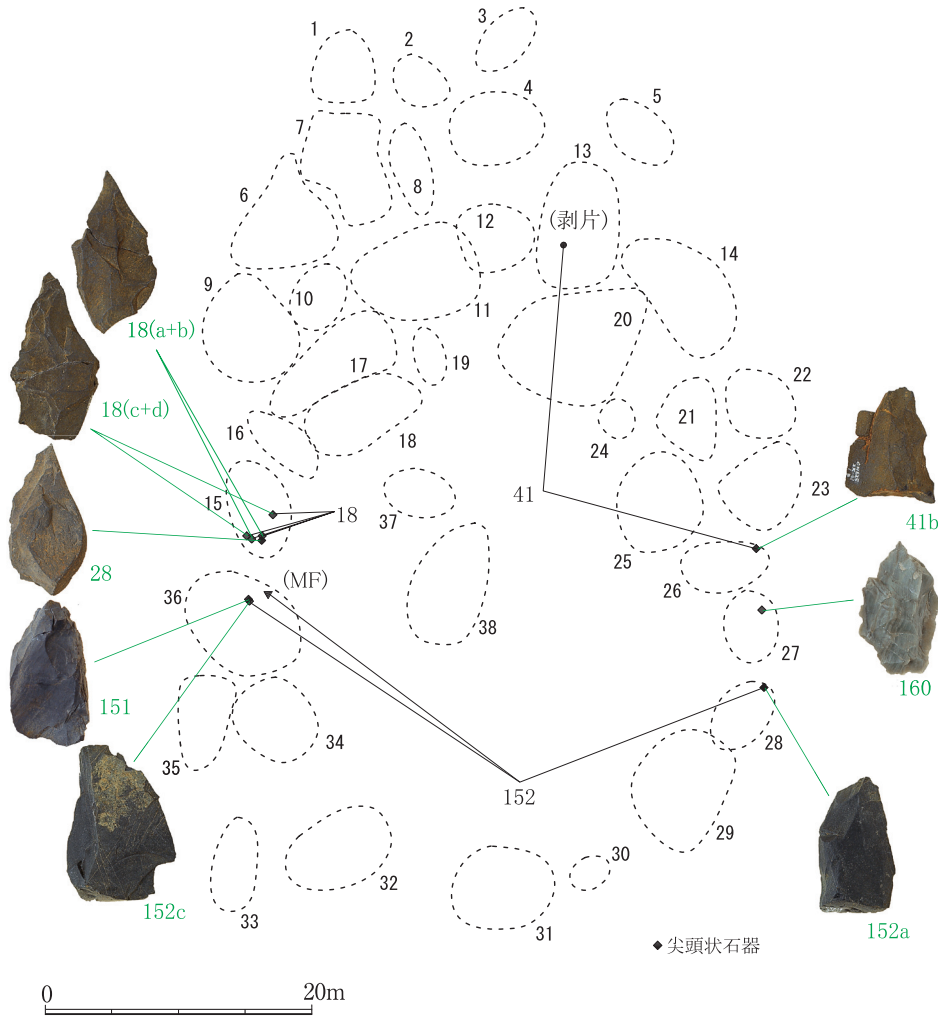


※引出線および接合結線頂点の数字は挿図番号
 ※挿図番号に続く括弧内の英数字は母岩番号
 ※石器は28~29%

3

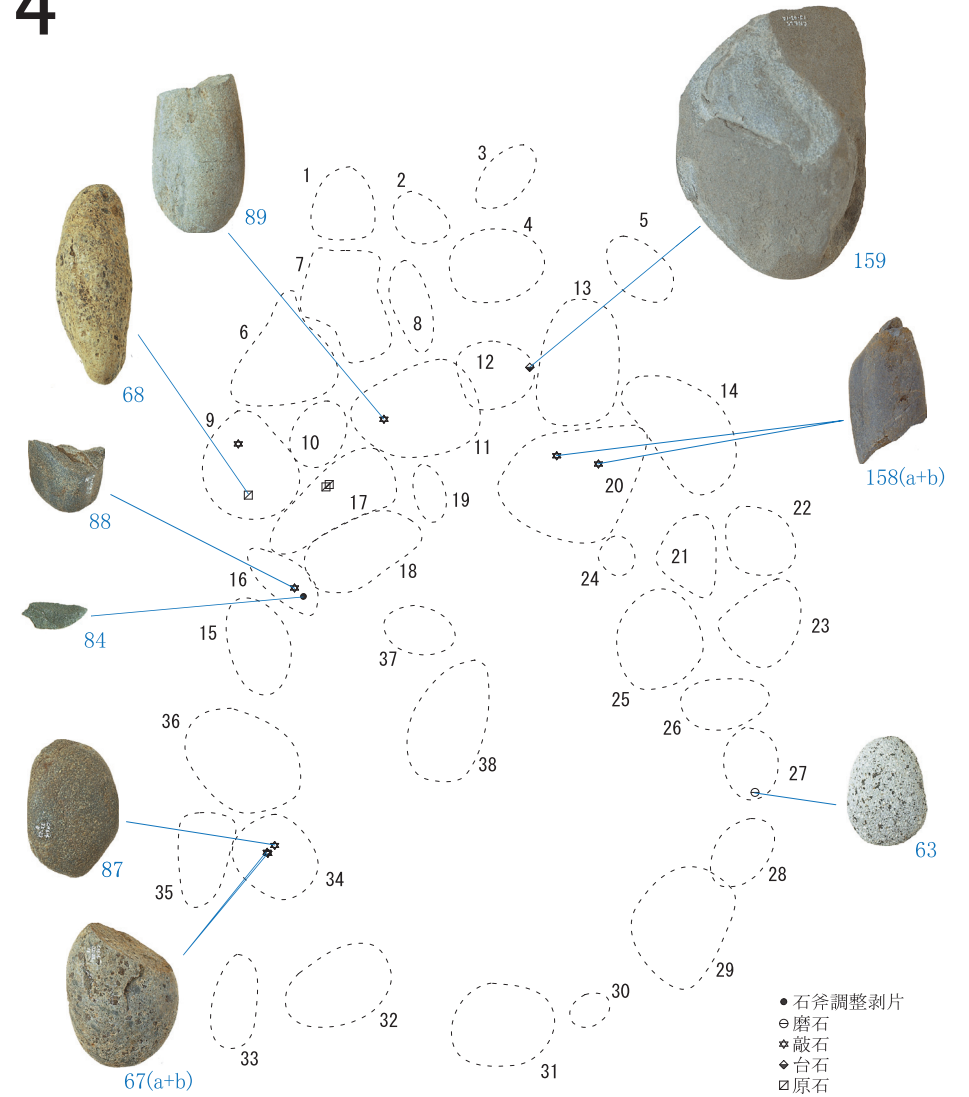
《尖頭状石器》

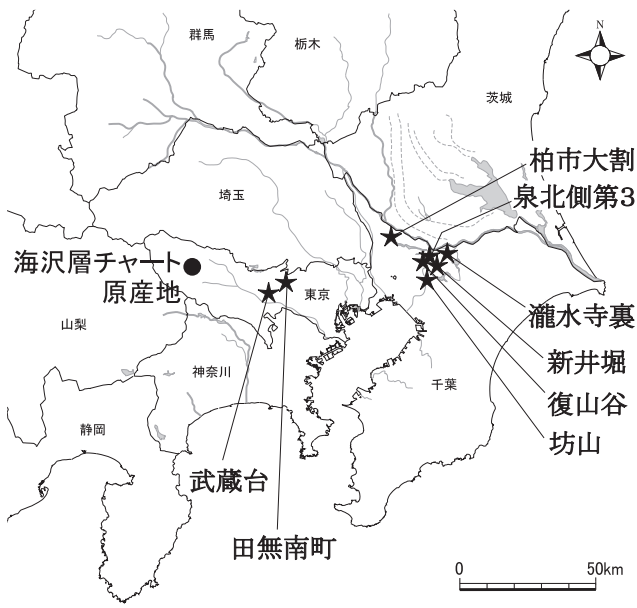
第2図 泉北側第3遺跡環状ブロック石器分布2



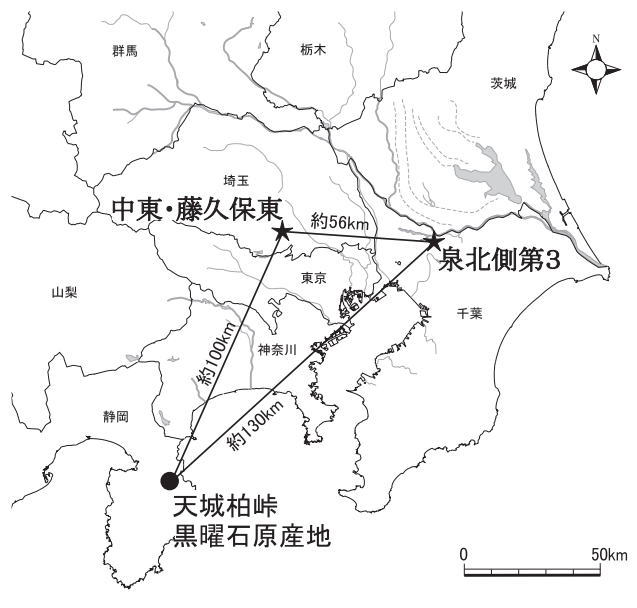
4

《磨石・敲石・台石・原石・石斧類》





第3図 海沢層産チャート分布



第4図 天城柏峠群産黒曜石分布

成形され、加工されたブロックに留まる。尖頭状石器は加工具が出土しないブロックに在り、加工具を補う何らかの道具として用いられていたことが考えられる。

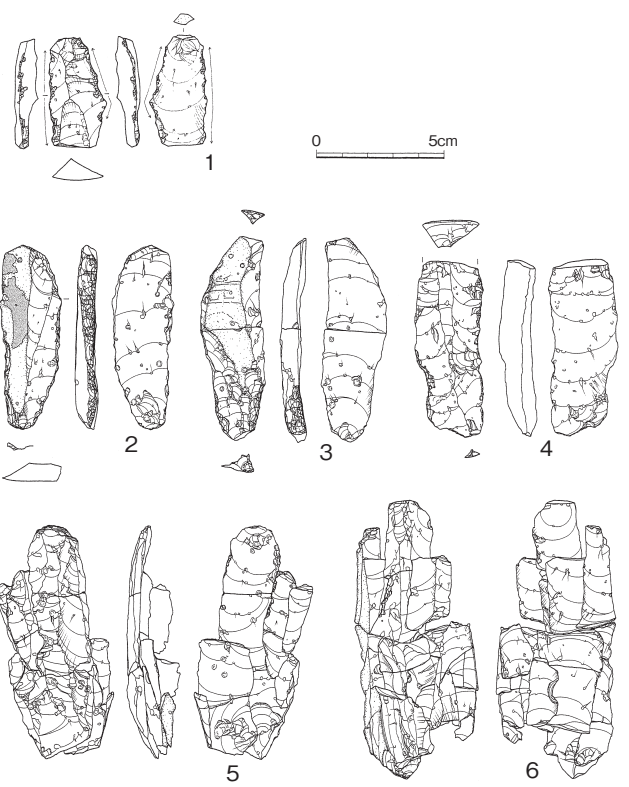
海沢層のチャートについて 第3図

黒曜石や安山岩などの火成岩は化学的な成分分析によって産地の特定が可能であるが、堆積岩産地は現在のところ推定の域を出ることはない。泉北側第3遺跡環状ブロックから検出されたチャートの多くは、青緑色や青灰色で、部分的に縞模様をなす玻璃質のものであり、東京都奥多摩町海沢を中心に分布する海沢層産である可能性が極めて高い³⁾。石材供給源に近いほど、遺跡における利用頻度は高くなり、離れるほどに低くなるのは当然の理であり、東京都においては府中市武蔵台遺跡⁴⁾、西東京市田無南町遺跡⁵⁾をはじめ、多くの遺跡・時期で海沢層産チャートが利用されている。千葉県では八千代市坊山遺跡⁶⁾、白井市復山谷遺跡⁷⁾、印西市瀧水寺裏遺跡⁸⁾、四街道市出口・鐘塚遺跡⁹⁾、柏市大割遺跡¹⁰⁾などが挙げられる。千葉県内にはⅨ層段階に多く持ち込まれているが、のちの時期にはほとんどみられない。

天城柏峠群産黒曜石について 第4・5図

黒曜石の母岩7種類の産地は和田鷹山群、諏訪星ヶ台群、高原山甘湯沢群、天城柏峠群の4地点を数え、各々狭い範囲内での検出・消費が確認された。

今回は当初、産地同定不可とされていた石材で、報告書刊行直前に「天城柏峠群産」と再測定された石刃



第5図 天城柏峠群産黒曜石製石刃資料
1. 泉北側第3遺跡 2～6. 中東遺跡第2地点

について取り上げた。ただ1点持ち込まれたこのかすかに緑青色を帯びた灰靄状の剥離面を持つ石刃素材は、下端が固定された状態で剥離され、両側縁に潰れたような加工痕・使用痕がめぐっている。

後期旧石器時代の相模野台地において柏峠産黒曜石

は、『近在産石材』として安定して供給される環境にあり、^{11・12} 柏峠周辺の遺跡から多く出土しているが、直線距離で130km離れた千葉県では稀である。

石材移動の興味深い例として中東遺跡¹³・藤久保東遺跡Ⅱ¹⁴・南止遺跡H地点¹⁵を挙げる。平成20年に埼玉県入間郡三芳町の中東遺跡第2地点Ⅸ層から出土した1,336点の黒曜石は原産地推定分析の結果、「天城地区柏峠系」であることが確認された。黒曜石原産地のひとつである伊豆半島から100km以上離れた武蔵野台地に10cmを超える礫塊が複数運び込まれて、規格的なサイズの石刃が量産された形跡が残されている（第5図）。中東遺跡に近在する同時期の藤久保東遺跡Ⅱでも天城柏峠群産黒曜石は石刃の形態で多出し、遺跡は環状ブロックを呈する。三芳町の遺跡ではⅨ層にのみ、天城地区の柏峠系黒曜石が顕著に見られ、それ以後はどの遺跡でも極端に少なくなる傾向がある、という。

泉北側第3遺跡環状ブロックの一端に1点のみ出土した天城柏峠群産黒曜石は、埼玉県三芳町で石刃の形態に加工されたのち、持ち込まれた可能性がある。

2. 復山谷遺跡（6次～8次）出土の彫器について

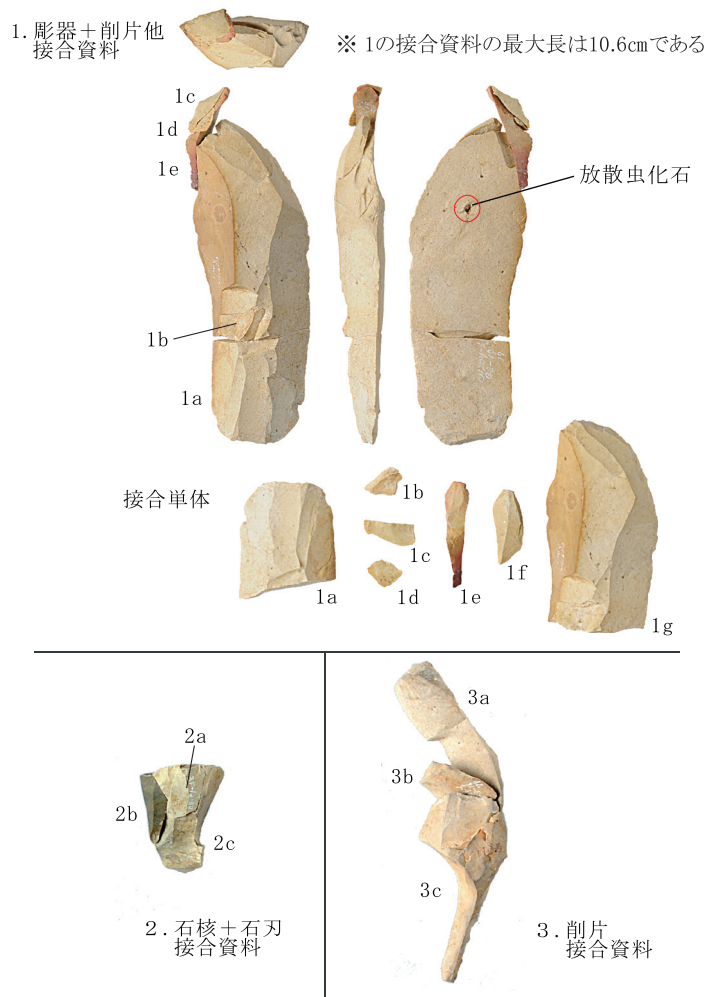
復山谷遺跡（6次・7次）第4文化層は立川ローム層Ⅲ層に包含される石器群であり、第32ブロックから第40ブロックの9か所が該当する。石器の接合関係などから、第40ブロックを除く8か所のブロックはほぼ同時期に形成されたブロック群である可能性が高い。第32～39ブロックで出土した石器649点の主要な器種組成は、ナイフ形石器15点、彫器3点、削器6点、楔形石器1点、石錐1点、削片13点、石核5点、敲石1点、台石4点、剥片類375点、碎片148点、礫・礫片77点である。石材数では玉髓が約35%、珪質頁岩約18%、ホルンフェルス13%、碧玉とガラス質黒色安山岩がそれぞれ8～9%を占め、流紋岩、砂岩、トロトロ石、チャートがこれに次ぐ。黒曜石は、和田鷹山群産の欠損部位の多い剥片1点が出土している。これら8か所のブロックでは43個体189点が接合し、ブロック間での接合資料では亜円礫から

小型の石刃を規則的に割り出す作業工程や、仕上げた石器が使われた形跡をみることができる。

本稿では、3点出土した彫器資料（珪質頁岩製1点、碧玉製2点）のうち、大型の石刃を素材にした神山型彫器に類似する接合資料とこれに関連する一部の資料について、形態と石材から考察していきたい。

なお、「削片」は“石器や剥片の一端に狭長な面を作り出すために剥離された剥片”¹⁶とされるが、彫器に伴う剥片、石刃を含め、ここでは広義にとらえた。

第6図1は彫器と削片を含む接合資料である。彫器1点（2片が接合して1点）と削片4点、剥片1点の計7点が接合した。素材石刃の末端部に、背面から腹面へ向けて加えられた剥離面を打面として背面側に彫刀面が作出されているが、打面と彫刀面の区別は明瞭ではなく、交互剥離によって両方から目的とする削片（削片）を得ようとするものであろう。この彫器は新潟県神山遺跡¹⁷を標識遺跡とする、いわゆる「神山型」と定義される特徴を持つものであり、「…石刃の腹面側の先端に細かな剥離で打面を作りだし、背面側に一



第6図 復山谷遺跡（6次～8次）Ⅲ層出土珪質頁岩

条の彫刀面を形成する¹⁸⁾。しかし、復山谷遺跡から出土した資料1の彫器の打面・彫刀面付近には使用痕が観察されず、削片には被熱痕や微細剥離痕がみられることから、小型の石刃作出を目的とし、使用したものと思われる。接合した7点は第33ブロックの中心部の1.5㎡の範囲内にまとまって分布し、上下に二分された彫器は約1mの距離を測る。

2は微細剥離痕のある剥片1点・剥片1点・石核1点の計3点が接合した。裏面下部の剥離痕は、左面下部の剥離痕に切られているため、上面を打面とした石刃作出工程よりも早い段階のものである。2aは両側縁辺に微細剥離痕がみられる。石核2cの打面は調整されておらず庇状の凸部が残っている。最終工程のみの資料であるが、調整部位、使用石材などから、荒川台型細石刃核との関連も指摘される^{19~24)}。石材は1の珪質頁岩2と部分的に似通う。全体的には灰白色だが、一部褐色から緑色で、油脂状の光沢を持つ珪質頁岩5が母岩である。2bは深緑色で2a、2cとは明確に異なっているが、本来の色調が2bの深緑色であり、白色を呈する2a、2cは被熱や風化による変色痕である^{註2)}。

3は珪質頁岩7を母岩とする削片3点の接合資料である。第37、39ブロック間で、最長8.57m離れて接合する。板状に分割された大型礫がサポート（素材）となる。サポートの厚みが石刃の幅となるように打面が丁寧に調整されながら3aと3bが剥離される。両側縁は打ち潰され、丸みを持っている。3a・3bとも

に刃こぼれがみられる。これらが剥離された後、素材は上下に持ちかえられ3cが剥離されるが、力は石核内部に向かい、底部を厚く残す形となった。ここからさらに剥離作業が行われているが、作出された剥片は検出されなかった。素材が小さくなくても、使えるだけ使いたい、というこの石に対する執着が感じられる。

石材について

1の石材は新潟県中越地方、十日町の清津川付近に分布する流紋岩質凝灰岩質頁岩と近似し、実体顕微鏡40倍で石器表面を観察した結果、赤みを帯びた結晶(肉眼で観察できるものは1点のみで斑晶ではない)は放散虫が珪化したものであることが判明した^{註2)}。同様の石材を用いた遺跡には長野県上ノ原遺跡(第5次・県道地点)²⁵⁾がある。

2・3のような白色でサラサラとした質感の珪質頁岩は、復山谷遺跡を中心とした半径10km圏内では伊西市(旧印旛郡本埜村)角田台遺跡²⁶⁾、佐倉市大林遺跡²⁷⁾のソフトローム層から出土した石器群の中にも見られる。石器群を構成する石材組成は、栃木県那珂川及び久慈川流域、福島県只見川流域、会津盆地周辺、新潟県阿賀野川流域、同信濃川流域などから採取された標本資料と近似する。²⁸⁾

原礫を用いた剥離工程が確認された吉ヶ沢遺跡B地点²⁹⁾の報告書によれば、阿賀野川に流れ込む長谷川流域からもたらされた石材であるという。試みに2011年8・9月に長谷川の流路探索を行ったが、珪化した頁岩は見つけることができず、白色粗粒の凝灰岩、流



第7図 採集礫 (左：常浪川 右：柴倉川)

紋岩が多くあった。このルート上から持ち運ばれた石材ではないのかもしれない。本流の阿賀野川上流に進み、支流である常浪川の小瀬ヶ沢洞窟付近に行くと30cmを超える頁岩礫が採取できた。自然面は滑らかな光沢を持ち、剥離面は褐色を帯びた灰白色でサラサラとした質感である。さらに支流を遡り、御前ヶ遊窟登山口付近の柴倉川まで行くと巨大な礫が多く、珪質な頁岩礫は常浪川ほどには見られなかったが、でこぼこした表面を剥いだところ、均質緻密な白色の剥離面が現れた（第7図）。

神山型彫器関連資料とその分布 第8図

1・2は神山型彫器標識遺跡である神山遺跡から出土したものである。この神山遺跡周辺には、貝坂遺跡、樽ノ木平遺跡、堂ノ裏遺跡、通り山遺跡など、同時代・同時期に形成された多くの遺跡の存在が知られており、杉久保型ナイフ形石器と神山型彫器を組成する一群の石材は“在地性の高い”頁岩が約9割を占める¹⁷⁾という。遺跡の立地する津南町の河岸段丘は、信濃川と中津川の浸食作用と当間山の隆起運動によって形成されており、旧石器時代に生きた人々の痕跡が数多く残されている。発達した段丘が風よけとなり、川は食物となる生物を育む一方、交通路としても利用されていたと思われる。

3～5は上ノ平遺跡C地点から出土したものである。上ノ平遺跡A地点³⁰⁾・C地点³¹⁾は新潟県東蒲原郡阿賀町の阿賀野川左岸に立地している。これらの遺跡では、灰白色で極細粒緻密、光沢を帯びる石材が多く用いられ、ツール製作や刃部再生が行われたことが

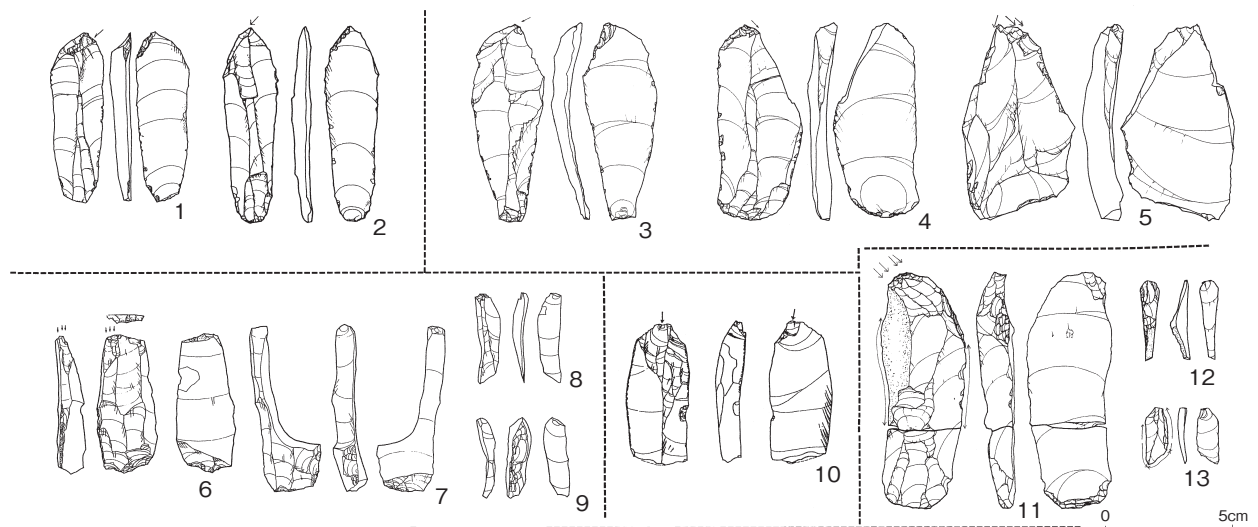
明らかであるものの、原石の形態で遺跡に持ち込まれた母岩はない。1994年の報告時点では、石材産地は新潟県北部から山形県であり、良質の頁岩は新潟県内では稀なようである³²⁾、とされていた。しかし後年、隣接する吉ヶ沢遺跡B地点の発掘で、原産地から持ち込まれた石材が消費されていることが確認された。遺跡近在の長谷川付近で採取される斑紋のある白色の頁岩で、七谷層から産出されるものである³³⁾。のちに、近似する石材で作られた石器が上ノ平遺跡でも出土していたことが確認されている^{34～36)}。

6～9は神奈川県大和市福田丙二ノ区遺跡^{37・38)}の神山型彫器と削片として報告された資料である。6・7は同一母岩である黒色頁岩資料であるが、接合関係はない。8・9は流紋岩製の削片である。

10の千葉市房地遺跡³⁹⁾のV層上面から出土した硬質頁岩製資料もまた単独出土である。

南関東では、杉久保型ナイフ形石器を伴うが黒色頁岩が用いられている福田丙二ノ区遺跡、磐越高地産硬質頁岩が単独で持ち込まれた房地遺跡、中越地方あるいは東部関東から大型の素材石刃が持ち込まれ、遺跡内で削片が剥離される工程がみられる復山谷遺跡（6次・7次）と三様である。

標識遺跡から出土する彫器はバリエーションに富んでおり、いくつもの規定を設けて区分けされる。復山谷遺跡（6次・7次）の彫器は神山型彫器の定義には合致し、新潟県の中越地方で産出される石材と共通するとの見解を得てはいるが、印西市角田台遺跡にもみられる石材であり、栃木県の伊勢崎遺跡^{40・41)}などと



第8図 神山型彫器関連資料

1～2. 神山遺跡 3～5. 上ノ平遺跡C地点 6～9. 福田丙二ノ区遺跡 10. 房地遺跡 11～13. 復山谷遺跡（6次～8次）

も近似する。堆積岩の産地同定は難しく、石材供給地の可能性は複数あるが、いずれにしても産地付近で石刃の形態に素材化されたものが当遺跡に持ち込まれ、剥離・加工されたものであろう。

新潟県を流れる信濃川、阿賀野川はそれぞれ長野県、福島県に源流を持ち、日本海に注ぎこむ。阿賀野川は福島県の荒海山、猪苗代湖などを水源とする阿賀川が、新潟県に入って阿賀野川と名前を変え、日本海へと注いでいる。現在の阿賀野川は新潟市の松浜町で日本海に流入しているが、1730（享保15）年までは信濃川と合流していた。

第8図では、杉久保石器群の一部をドットで示し、神山、上ノ平、吉ヶ沢の3遺跡を記載した。杉久保石器群は北東から南西に、海岸線と平行するように河川の中流域に弧線状に並ぶ。遺跡を線で結ぶルートが当時存在したかどうかはわからないが、河口付近には食糧・モノ・技術の交流地点があったのではないかと推測される。近年の石材産地調査成果からは石器石材に用いられた石の所在が明確になりつつあるが、血管のように張り巡らされた河川を頼りに、あるいは利用して神山型彫器などの石器・石材・製作技術などが広まったものであろう。川の源流をたどっていくと、甲武信岳のように山梨、埼玉、長野にまたがるような分水嶺に出ることがある。河口を収束の場とするならば山の頂は分岐の場の一つであり、次に進む道筋を示す大事な起点である。もし、復山谷遺跡の神山型に類する彫器が十日町の石材であるならば、信濃川上流から鑄川を經由して、利根川水系でもたらされた可能性が考えられる。同じ文化層に帰属するブロックから出土した、唯一の黒曜石が和田鷹山群産の石刃であることから搬入路の推定を補強できると思われる。一方、阿賀野川支流の長谷川近辺の珩質頁岩とすれば、阿賀野川の源流の一つ、荒海山を經由して高原山を下り、鬼怒川沿いに下野－北総回廊を通じて遺跡に搬入されるルートも想定される。

おわりに

平成20年に泉北側第3遺跡の整理事業に着手した。灰色のテン箱に白いウレタン綿を敷き、洗われて袋詰めされた石器をグリッドごとに並べるうちに、なんてきれいなんだろう、と感嘆の声が出た。基礎整理が済み、母岩ごとに分けていく作業中にはその思いはますます強まり、黄玉の黄、碧玉の赤・緑、メノウのオレンジ縞、チャートの濃緑・薄緑・青、珩質頁岩の黄土色・褐色、黒曜石の黒など、テン箱ごとに展開される色彩の鮮やかさに、この時代の人々も美しい石を慈しんだのかもしれないと強く感じた。前第73号5頁には、最多出土母岩を除いた石材を石材の色に似たドットで示した。母岩は数のまとまりを持ちながらも点在し、本報告205～214頁で図化したように、占有の場から数点が他の場に運ばれ、結果として最も少ない出土点数（4点）のブロックであっても4種類以上の母岩で構成されることが確認できた。

この一方で、泉北側第3遺跡環状ブロックの中心から360度見回した時に、配された石器が示す延長線上にそれらの石材産地があることに思い至った。このような地図的機能も旧石器時代の人々の意識的な行動や伝達方法のあらわれとして捉えられはしないだろう



第9図 神山型彫器関連遺跡と主要河川

か。

石無し県といわれる千葉県に集まる石器石材を、多くの研究者にみていただき、旧石器時代の人々と石が辿った道を知るために、遺物写真は銀盤で撮影し、カラーポジ、高解像度で、昇華型の印刷機のある印刷業者に委託した。結果、報告書には一部に色むらが発生したが、業者の厚意により、別冊の遺物図版が出来上がった次第である。この別冊版には石の色、特徴がそのまま表れていると思う。今後、県内外問わず石材情報がいただけることを期待する。

復山谷遺跡（6次～8次）では、昭和62・63年度、平成23年度調査分の報告を行った。昭和50年度から54年度の調査報告書は既刊であり、遺跡全体の総括的なことは昭和62・63年度分を含めた概要報告や千葉県史などでも周知されているため、石器の事実記載に重点を置いて本報告とした。研究連絡誌第74号では、田村隆氏に契機をいただいた「神山型彫器に類する資料」について、石器を持参して各地の研究者のもとに赴き、石材・製作技術など、教えを乞うた。結論には至らないが、現在までに知り得たことを記した。

次号以降では市野谷二反田遺跡や源七山遺跡など、これまでに携わってきた遺跡の再検討を行いたい。

謝辞

新潟県教育庁文化行政課の澤田 敦氏からは復山谷遺跡出土の神山型彫器に類似する資料写真について、上ノ平遺跡A地点・C地点との形態や石質などの比較から、ご教示をいただきました。平成23年6月、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 新潟県埋蔵文化財センターでは上ノ平遺跡C地点、吉ヶ沢遺跡B地点の資料を中心に実見させていただきました。平成23年9月、奈良国立文化財研究所で行われた文化財担当者専門研修「石器・石製品調査過程」では、長野県野尻湖ナウマンゾウ博物館の中村由克氏による石材の講習が行われ、顕微鏡観察をはじめとする様々な鑑定法から本資料の産地を推定していただきました。また研修の際には芝 康次郎氏、国武貞克氏から有意義なご意見をいただきました。佐藤宏之氏、鈴木美保氏、長崎潤一氏、田村 隆氏、橋本勝雄氏、島立 桂氏、新田浩三氏、田島 新氏にはご批判を含め様々なご教示を賜りました。皆様には記して感謝申し上げます。

註

1) a種：横長剥片を素材として打撃軸を横位と置く。器体は縦方向に長じ、打瘤の膨らみを器体中央部に持つことになる。器厚のあるものは平坦剥離によって膨らみを削ぐように丁寧に除去される。減厚は打瘤部分であることが多いが、背稜であったり打面部そのものであったりする。刃部には微細な刃こぼれがみられる（b種・c種・その他は報告書参照）。

a種を除いた簡便な形状の台形様石器はあらかじめ最終形態を見越して成形され、最小の労力で刃器となしているものが大多数であり、母岩単位で消費されるため接合資料が多い。台形様石器の分布密度の濃い部分は3か所あり、北から順に、北側集中域、環のめぐる北西側と東端部である。

2) 2011年9月、奈良国立文化財研究所にて野尻湖ナウマンゾウ博物館の中村由克氏のご指導により実見にて確認した。氏にはこのほかの鑑定法として、比重測定法、磁石鑑定法を教わり、復山谷遺跡（6次～8次）報告書第4節第3文化層では比重測定法を、石材・石種に迷うときには磁石鑑定法を試みている。

引用参考文献

- 1) 出居 博 2004『上林遺跡』佐野市教育委員会
- 2) 出居 博 2006「環状に分布する石器群に定住性を探る－上林遺跡集落形成論からの視座－」『唐澤考古』251-28頁 唐沢考古会
- 3) 田村 隆・国武貞克 2006「下野－北総回廊外縁部の石器石材（第3報）」『千葉県史研究』第14号（財）千葉県史料研究財団
- 4) 伊藤 健 2010『武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺跡』東京都埋蔵文化財センター
- 5) 小田静雄・小日置晴展 1992『田無南町』都立学校遺跡調査会
- 6) 大野康男 1993『八千代市坊山遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－』(財)千葉県文化財センター
- 7) 田村 隆 1982『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』(財)千葉県文化財センター
- 8) 酒井弘志 2004『瀧水寺裏遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 9) 岡田誠造 1999『四街道市出口・鐘塚遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 10) 落合章雄・島立 桂 2012『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書4－柏市大割遺跡・須賀井遺跡－旧石器時代編』(財)千葉県教育振興財団
- 11) 諏訪問 順 2010「天城柏峠産黒曜石の流通」『黒曜石が開く人類社会の交流』Ⅱ「黒曜石の流通と消費から見た環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容」グループ
- 12) 諏訪問 順 2011「後期旧石器時代 相模野台地における黒曜石の利用と展開」『日本考古学協会2011年度大会発表要旨』16-17頁 一般社団法人日本考古学協会
- 13) 大久保 淳 2011『中東遺跡第2地点・第3地点』三芳町教育委員会
- 14) 松本富雄・柳井章宏・大久保 淳 2009『藤久保東遺跡Ⅱ』三芳町教育委員会
- 15) 大久保 淳 2010『南止遺跡H地点』三芳町教育委員会
- 16) 松藤和人 2000『旧石器考古学辞典』63頁
- 17) 村山 繁・加藤雅一 1997『神山遺跡群－国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡確認調査概要報告－』新潟県中魚沼

郡津南町教育委員会

- 18) 麻柄一志 2000『旧石器考古学辞典』31頁
- 19) 佐藤宏之 2011「荒川台型細石刃石器群の形成と展開」『考古学研究』58-3 51-68頁
- 20) 阿部朝衛 1992「新潟県関川村荒川台遺跡第1次調査報告」『法政考古学』第18集
- 21) 阿部朝衛 1993a「細石刃技法の把握－荒川台技法－」『細石刃研究の新たな展開』I 161-171頁 佐久考古学会 八ヶ岳旧石器研究グループ
- 22) 阿部朝衛 1993b「新潟県荒川台遺跡の細石刃生産技術の実態－荒川台技法の提唱－」『法政考古学』第20集 1-22頁
- 23) 阿部朝衛 2002『荒川台遺跡－1989年度調査－』帝京大学文学部史学科
- 24) 阿部朝衛 2010「新潟県荒川村荒川台遺跡第11・12次調査」『第24回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』103-109頁
- 25) 中村由克 2008『上ノ原遺跡（第5次・県道地点）』信濃町教育委員会
- 26) 田村 隆 2004「第1章旧石器時代 角田台遺跡」『千葉県歴史 資料編考古1（旧石器・縄文時代）』132-133頁（助千葉県史料研究財団）
- 27) 田村 隆・野口行雄 1989『佐倉市南志津地区埋蔵文化財調査報告書1－佐倉市御塚山・大林・大堀・西野・芋窪遺跡－』（助千葉県埋蔵文化財センター）
- 28) 田村 隆 2004「石器の変遷」『千葉県歴史 資料編考古4（遺跡・遺構・遺物）』10-19頁（助千葉県史料研究財団）
- 29) 沢田 敦・坂上有紀 2004『磐越自動車道関係発掘調査報告書 吉ヶ沢遺跡B地点』新潟県埋蔵文化財調査報告書第132集（助新潟県埋蔵文化財調査事業団）
- 30) 沢田 敦・飯坂盛泰編 1994『磐越自動車道関係発掘調査報告書上ノ平遺跡A地点』新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集（助新潟県埋蔵文化財調査事業団）
- 31) 沢田 敦 1996『磐越自動車道関係発掘調査報告書上ノ平遺跡C地点』新潟県埋蔵文化財調査報告書第73集（助新潟県埋蔵文化財調査事業団）
- 32) 阿部朝衛 1995「新潟県北部における石器石材の調査」『帝京史学』10 353-372頁
- 33) 中村由克 1995「長野・新潟における石器石材について」『石器石材～北関東の原石とその流通を中心として～』予稿集 笠懸野岩宿文化博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 34) 秦 昭繁 2007「新潟県の珪質頁岩石材環境と特徴」『東北日本の旧石器文化を語る会』第21回 51-57頁 東北日本の旧石器文化を語る会
- 35) 阿部朝衛・塚田清啓 2007「新潟県海岸地域における石材調査」『東北日本の旧石器文化を語る会』第21回 58-66頁 東北日本の旧石器文化を語る会
- 36) 倉石広太 2007「魚沼地域の石材環境」『東北日本の旧石器文化を語る会』第21回 76-84頁 東北日本の旧石器文化を語る会
- 37) 峰 治・畠中俊明・井関文明 1999『福田丙二ノ区遺跡－海上自衛隊厚木航空基地内隊舎建設に伴う発掘調査－』（助かながわ考古学財団）
- 38) 峰 治・畠中俊明・井関文明・白石浩之 1999『（発掘成果図録）福田丙二ノ区遺跡－厚木基地の旧石器時代－』（助かながわ考古学財団）
- 39) 湖口淳一 1987『子和清水・房地遺跡・一枚田遺跡』（助千葉市文化財調査協会）
- 40) 吉田 哲 2000『伊勢崎Ⅱ遺跡（旧石器・縄文・弥生時代編）－一般国道294号八木岡バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅲ－』（助栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター）
- 41) 吉田 哲 2009『原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎Ⅲ遺跡－北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査XV－』（助とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター）